

(ケース2)
 ・パーキンソン病のため療養中。
 ・徐々に身体機能が低下して寝たきりの状態だが自宅で過ごしたいと、一人暮らしの継続を希望している。

自宅で、快適な生活を続けられるように支援していきます。



からだの機能を保つための支援

- ・各職種が薬の投与状況を共有して、必要な薬を確実に投与できるように支援する
- ・飲み込み（嚥下機能）が低下していることも多いため、検査をして安全で食べやすい食事形態（軟らかいもの、刻んだものなど）にすること、口の中の清潔を保つことで、肺炎を防止する

薬の服用時間を訪問介護などが滞在している時間帯にすることもあります。飲み込みにくくなっている場合は、粉薬などへ変更していきます。



一人暮らしを支えるための支援

- ・1日複数回訪問して、自力では困難な排泄、入浴や着替えなどへの支援や、困難な家事全般（買い物、調理、洗濯、掃除など）を行う

ご家族への支援

- ・ご本人の状態や支援状況を共有して、ご本人が希望する生活を続けられるように支援する
- ・看取りへの不安が軽減するように支援する

状態が変化した時には、ご本人が「どのように療養したいか」、希望を確認し、ご家族も含めて今後の療養について検討します。



精神面への支援

- ・ご本人の言葉を傾聴するなど、心のケアを行う



状態の変化に備えた支援

- ・ご本人の状態について「いつもと違う」といった情報を、関わっている職種で密に共有する
- ・24時間対応できる体制
- ・状態が急に变化した時の連絡体制の（ご家族も含めて）申し合わせを行う

一人暮らしなので、変化を早期に発見するためには、密な情報共有が必要になります。

ご家族が安心して最期まで見届けられるようお手伝いします。



講師の方々へ うかがってみました

Q 訪問診療を利用するタイミングを教えてください。

A よぎったら、まず相談いただきたいと思います。



Q いつ、「最期の時をどう過ごしたいか」についての希望を決めて、周りに伝えればよいですか。



A 希望・意思は状況によって変わるので、普段から家族など身近な人と話し合ひましょう。好きなものについて話し合うこと、「最後の晩餐」といったテーマであると話しやすいと思います。

講座では、ご本人の好きなものを取り入れた療養環境作りをご家族と共に行った御経験についてのお話もありました。

「最期の時をどう過ごしたいか」とは？

ご自身が大切にしていることや望み、どのようなケアを望んでいるか、考えてみましょう。その考え（希望）について、家族や身近な人と話し合うなど共有することが大切で、一般的に「人生会議」と言われています。



もっと詳しく知りたい方は・・・

相談先、在宅医療・介護サービスの料金など詳細、人生会議については「おうち療養情報紙・保存版」介護保険については「あなたと歩む介護保険」（パンフレット）を参考にしてみたい方がでしょうか。右記のQRコードで、流山市のホームページからご覧になれます。



主な相談先について

通院中の場合	かかりつけ医	介護保険をすでに利用中の場合	ケアマネジャー（介護支援専門員）
入院中の場合	主治医や看護師 病院にある「地域医療連携室」などにいる医療相談員	どこに相談していいかわからない場合	高齢者なんでも相談室（地域包括支援センター）

講座では、「自宅でお看取りした経験のある、ご家族」からのお手紙が代読されました。

（手紙の内容：要約している部分があります）

私が72歳、妻が60歳、結婚して39年目の夫婦でした。私が年下の妻を介護、そして看取りをすることは全く考えておりませんでした。妻は定年後も会社に勤務することを決めて張り切っていました。体調に異変を感じて受診したところ、がんが発覚しました。

原発不明がん、治療の方法がないとの診断を受け、妻も私も大変な衝撃を受けました。日々体調が悪化して車椅子が必要となり、緊急に腎臓の手術のため入院になりました。術後1週間たち、医師から「今後は、入院、通院、在宅、どのようにされますか」と話がありましたが、どうしたらよいかわからず、途方に迷いました。妻のどうしても家に帰りたいとの強い意志で在宅療養を選択しました。直ちに始まる自宅での生活に向けて、市役所に行き、介護保険の手続きをしました。そしてケアマネジャーの手配。寝たきりの妻のための電動ベッドのレンタル、訪問診療、訪問看護、訪問薬剤などの手配のすべてを、ケアマネジャーにいただき、生活環境が整いました。

退院した翌日、早速来ていただいた訪問診療の医師から妻の容態について、大変厳しい状態にあるとの説明を受けて混乱してしまいましたが、その日その日を大切に、自分でできることは何でもしようと心に決めました。訪問診療の医師は、じっくり妻の話を聞いてくれて、不安なことがあるとすぐ答えてくれるので、私も救われました。また、薬の調整により、足のむくみがとれて奇跡が起きたと思いました。毎日、訪問看護が来てくれることで、何でも話せる友達のようにになり、妻の笑顔が増えました。

妻は食が細くなってしまいましたが、薬を服用するために少しでも食事をとらなければと、ほんの一口を流し込むように食べていました。料理の経験がない私に、妻は食べたいものがあると作り方をメモしてくれるので、それを見ながら作っていました。このメモは妻が亡くなってからも、私の食事のレシピとして、大いに役立っています。

退院して、自宅での生活が4週間経過しました。その日は息子が2歳の孫を連れて見舞いに来てくれました。妻は辛いはずなのに、膝に孫を乗せ、笑顔で孫をあやして嬉しそうでした。息子が作った夕飯を孫と一緒に食べて、いつもより食が進んでいました。その夜介護後に、妻はそれまでの苦痛から解放されて清々しく嬉しそうな表情で「ありがとう。私は幸せものだね。」と言ひ、眠りにつきました。しばらくすると、容態が急変しました。妻の手を握り、懸命に励ましの声をかけましたが、徐々に手の力が抜けていきました。妻の最期の瞬間までそばにいたことができました。自宅で看取ることができて、本当によかったと心から思いました。

妻が亡くなってから、看護師さんから本人との会話の記録をいただきました。そこには「私は幸せよ。皆よくしてくれるし、家に帰ってきてよかった。」との言葉が綴られていました。

慣れない介護は大変でしたが、妻が望む自宅での生活を叶えてあげられたのは、多くの方々の支えがあったから、と心より感謝しています。